

論文の内容の要旨

論文題目 フランスにおける日本古典詩歌受容と 20 世紀日仏文化——交差と融合

氏 名 金 子 美 都 子

<序章> 本論文の主要な研究目的は次の諸点にある。日本の古典詩歌はフランスにどのような経路を経て、またどのような個人または集団の活動によって導入されたか。その際、どのようなフランスの関心を引き起こしたか。さらに、それがどのような影響をフランス詩壇にもたらし、また「新詩形」を生み出したのだろうか。西欧の詩との比較を考慮し、「和歌」、「俳句」等の代わりに、それらを包含するより上位の語「詩歌」を題目に用いた。また、長い歴史を持つ日本古典詩歌をすべて対象とすることは不可能であり、フランスにおいては特に受容の度合いが大きかった「俳句」を主たる対象とした。先行研究としては、ウィリアム・レオナード・シュワルツ William Leonard Schwartz, *The Imaginative Interpretation of the Far East in Modern French Literature 1800-1925* (Librairie Ancienne Honoré Champion, 1927) およびその邦訳書、北原道彦訳『近代フランス文学にあらわれた日本と中国』(東京大学出版会、1971)がある。シュワルツの指摘するように、東洋の中でもアジアに関する最初期フランスの研究としては、エミール・デシャネルの中国研究『ヴォルテールの演劇』E. Deschanel, *Théâtre de Voltaire* (1886)、ピエール・マルチノの『17・18 世紀フランス文学にあらわれた東洋』P. Martino, *L'Orient dans la littérature française au XVII^e siècle et au XVIII^e siècle* (1906) 等があげられる。19 世紀とともに「東洋からの有益な収穫」が得られるというマルチノの見解、インドシナ

についてのカロオとレジスマンセの完璧な業績が存在することを考慮し、シュワルツの研究はフランス文学における「極東」に光を当てるなかで、この書の出版年 1927 年において「フランス詩と日本の詩の接触」は重要なテーマであったことを示している。本邦においても、このテーマに関する多くの優れた先学の研究があるが、およそ 90 年を経た現在、シュワルツを超える体系的な研究は存在しない。そこで本論文提出者は、シュワルツの網羅的で、やや錯綜した感のある研究というより、焦点を絞った核心に踏み込んだ研究を試みた。また本研究は、大島清次氏の主張「ジャポニズムの括弧をはず」(『ジャポニズム』講談社学術文庫、1992、354 頁) し、フランスにおける日本古典詩歌の受容を美術におけるジャポニズムと連動させ、20 世紀における日仏文化の交差・融合として再考することも目的のひとつとした。

<第 I 部 日仏修好の黎明とフランスにおける日本古典詩歌の翻訳—美術のジャポニズムを通過して> 第一章では、まず、1858 年の日仏修好条約の時代からおよそ 10 年後のレオン・ド・ロニーによる『詩歌撰葉』 *Anthologie japonaise* (1871) を主として対象とした。昨今の多くのロニーの伝記的研究、黎明期の日本語教育または帝国図書館附属東洋語学校に関する研究、とくに松原秀一、ジャン＝ジャック・オリガス氏らの総括的ロニー研究を踏まえて、19 世紀後半における日本古典詩歌研究の両側面、「オリエンタリズムの枠組み」としての側面と、帝国志向と相反する「異文化理解」としての側面との間での、ロニーの業績の限界と貢献を見た。万葉集を主とするロニーの翻訳『詩歌撰葉』のいまだ本格的研究がなされていない理由として、当書の第 1 の目的が、学生の日本語教育にあることが挙げられるが、ここに最初期の古典詩歌受容の現実があること、同時に、一方『詩歌撰葉』には、日本古典詩歌の簡潔性と暗示性の最初の言及がみられることを指摘した。またこの期の日本古典詩歌紹介における「和歌」の独占について検討した。第二章では『古今集』『新古今集』所収の和歌翻訳を主とする、ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』 *Poèmes de la libellule* (1885) を文学性に注目した最初の日本古典詩歌受容作品として捉え、高橋邦太郎『『蜻蛉集』考』の先鞭性、その後の研究者たちによる構成・出版年等に関する研究の長足の進化をまとめた。さらに、「こころをたね」とした「抒情性」の指摘、西園寺の和歌散文訳を土台としたジュディットの 5・7・5・7・7 音綴詩篇の「文学的エキゾティスム」を、その題材と詩形(音綴数・脚韻)の特殊性(フランス詩の伝統的韻律からの乖離)を通して象徴派自由詩へと向かうフランス詩壇の流れのなかで論じ、同時に 19 世紀後半に風靡した美術のジャポニズムに呼応した自然への審美観を考察した。またパルナシアンから象徴詩への移行の中で、エキゾティスムの「客体性」から逸脱する徴候をヴェルレーヌ詩篇「エピグラム」に確認した。第三章では美術評論家、エルネスト・シェノー« *L'Art*

japonais» (1868)、フィリップ・ビュルティエの最初期論文《Japonisme》(1872)、自然主義作家ゴンクールの『日記』等において、日本芸術の本質のキー・ワード「非対称性」「生の原則」「ファンタジー」(創意)及び詩文への関心を具体的に確認し、《Japonisme》の語は美術工芸のみへの関心ではなく、日本の生活に通底する思想、ものの捉え方への関心であることを見た。

<第Ⅱ部 アジアへの覚醒—ポール＝ルイ・クーシューの日本> 1900年過ぎから日露戦争を経て第一次大戦へ向かう「黄禍」から対話の日仏関係への移行時代における俳句の本格的紹介・翻訳の期を扱う。フランスでの俳句の紹介は、ヘンリー＝D. デイヴレーHenry-D. Davrayによる、アストン著作『日本文学史』(1899)の仏訳本 (*Littérature japonaise par W. G. Aston*, (1902)が最初であるが、第四章では、1906年、例句158句を含むフランス初の本格的な俳句論「ハイカイ (日本の詩的エピグラム)」*Les Haïkai (Épigrammes poétiques du Japon)*を当時のパリの若い総合文芸誌『レ・レットル』誌 *Les Lettres* (1906年4・6・7・8月)に発表したポール＝ルイ・クーシューPaul-Louis Couchoudについて論じた。初期俳句論として双璧を成すチェンバレン「芭蕉と日本の詩的エピグラム」« *Bashô and the Japanese Poetical Epigram* » (*Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XXX. 1902)と比較し、クーシュー俳句論における「簡潔性」「省略されたサンタックス」[短い驚き][暗示]に代表される近代性への示唆、翻訳可能性へのクーシューの挑戦(三行詩など)、主客対等な文化交差・文化相対主義を論じた。さらに、クーシューのヘレニズム精神、アルベール・カーン世界周遊制度とその活動、アナトール・フランス協会機関誌『赤い百合』(nos. 99-104)掲載の「未刊書簡集」における巨匠アナトール・フランスとの学問上・精神上的の緊密な関係等を論じ、子規の俳句革新をも含め、クーシューの『アジアの賢人と詩人』(1916)誕生の背景を述べた。第五章ではクーシュー創始の「模倣の詩」である「三行詩」(フランス・ハイカイ)における統辞面での詩的要素を論じた。

<第Ⅲ部 新しい詩と詩歌の変容—戦禍とフランス・ハイカイ> 1906年から第一次世界大戦を通過して1920年代フランス詩壇及び社会における新詩としてのハイカイの進展期を扱う。第六章「サンボリスムの危機—フェルナン・グレッグと『レ・レットル』誌」、第七章「塹壕—瞬間の「生」と絶え間なく続く命の讃歌—ジュリアン・ヴォカンス」、第八章「戦禍の街ランス 20年代と新しいサンシビリテールネ・モーブラン」、第九章『リテラチュール』誌からシュールレアリスム—ポール・エリュアールと「ここで生きるために」等の各章で、ジャン・ポーラン、ジャック・リヴィエール、ジャン＝リシャール・ブロックなどの *NRF* の動きをも通しての、1) 日本古典詩歌の受容の接点・あり方、具体的には、象徴主義からダダを通過してシュールレアリスムへ進展したフランス近代詩と関わった受容の実態、2) 日本詩歌受容によるフランス近

代詩の変容と新詩「フランス・ハイカイ」の本質を、リヨン市立図書館・古文書館、パリ INALCO、パリ国立図書館、ギメ美術館、ランス・メディアテーク図書館などでの資料収集、大小雑誌、関係者との面談、書簡、ダダ期の新雑誌『リテラチュール』誌、 *NRF* 誌、〈*Le Grand jeu*〉に関する新たな資料等の詳細な検討によって、近代詩史に位置付けた。すなわち、ハイカイを撰取したフランス詩人たちは、まず象徴派を「生」に立ち返らせ、次いで、象徴派からシュールレアリスムをつなぐ前衛詩派の一つとして、当時の詩壇、特に「不安と恐怖」の第一次大戦時代に胎動を持つ「否定」「崩壊」「文法規範からの離脱」に依拠するダダの運動と微妙に連動しつつ、それらのある意味で呑みこみ、新しい価値基準に向かって進展した新詩運動を実践したこと、特にブルトンらによる気鋭の新雑誌『リテラチュール』誌とヴォカンス、エリュアール、ハイカイとの関連性の意味を初めて指摘し、言及した。日本古典詩歌は、 *NRF* 誌主宰となるジャン・ポーランを中心に、これまで想定された以上強度にフランス詩にかかわったといえる。一方ではエリュアールらのシュールレアリスム、ルコントらの「ル・グラン・ジュール」（のちに前者と関連を持つ）の理念の萌芽となり、一方では戦禍の感性を模索する新詩「三行詩」（ハイカイ）としてモーブランらの知識人に受容された。こうした 20 世紀初頭の日仏文化交差・融合の一例を、国際関係変容の 1920 年代における松尾邦之助を中心に、キク・ヤマタ、堀口大學、高浜虚子のフランスにおける日仏ネットワークからも考察し、照射した。

〈終章〉 19 世紀末から 20 世紀のフランス詩のなかでの日本古典詩歌受容は定型韻律詩の否定の流れと呼応し、「凝縮性」によってフランスにおける「詩概念」を変革したこと、および、スピール、モッケル、ドロップル、エチアンブル等を参照し、「自由詩」の進展・成熟段階と詩法上の理論面から、ハイカイにおける「三行詩」の文体的近代性とその必要性を跡づけた。